

Patch for Oracle Linux



特記事項

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、[特記事項 \(##### 26\)](#)に記載されている情報をお読みください。

本書に関する注意事項

本書は、BigFix バージョン 9.5 と、新しい版で明記されていない限り、それ以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

目次

特記事項.....	2
本書に関する注意事項.....	3
第 1 章. 概説.....	1
サポートされるアーキテクチャ、エラッタ、リポジトリ.....	2
サイト適用条件マトリックス.....	5
Fixlet フィールド.....	5
第 2 章. セットアップ.....	8
サイトのサブスクリプション.....	8
BigFix Patch for Oracle Linux サイトへのサブスクライブ.....	8
ローカル・リポジトリの設定.....	9
第 3 章. Patch for Oracle Linux の使用.....	10
Fixlet を使用したパッチ.....	10
YUM ユーティリティーを使用したパッチ適用.....	10
置き換え.....	11
第 4 章. YUM トランザクションの管理.....	12
YUM トランザクションのロールバック.....	15
YUM トランザクションの取り消し.....	16
YUM トランザクションのやり直し.....	17
YUM のパッケージ更新の確認.....	18
第 5 章. カスタム・リポジトリの管理.....	19
リポジトリの登録.....	20
エンドポイントからのリポジトリの登録解除.....	20
リポジトリの追加.....	21

リポジトリのインポート.....	22
第 6 章. よくある質問.....	23
付録 A. サポート.....	25
特記事項.....	26

第 1 章. 概説

BigFix® Patches for Oracle Linux を使用すると、Linux™ 最新の更新およびサービス・パックでクライアントを最新の状態に維持できます。

パッチ管理は、BigFix の Oracle Linux 用パッチ・サイトを介して提供されます。BigFix は、新規のパッチまたは更新が入手できるようになるたびに Fixlet をリリースします。Fixlet により、企業内でそのパッチまたは更新を必要とするすべてのコンピューターが識別され、修正が適用されます。BigFix コンソールのオペレーターは、キーを数回押すだけで、関係するすべてのコンピューターにパッチを適用し、ネットワーク全体の適用の進行状況を視覚化することができます。

BigFix エージェントは、オペレーティング・システムのバージョン、ファイルのバージョン、システムの言語、および他の関連する要因をチェックして、パッチが必要かどうかおよびいつ必要となるかを判別します。

Fixlet により、大量の更新およびパッチを比較的簡単に管理することができ、どのようなスケジュールの下でも、自動化され、対象が絞り込まれた適用作業を実行できます。ネットワーク帯域幅を最適化するために大容量のダウンロードを段階的に実行でき、インベントリーまたは監査の制御のために、適用プロセス全体をモニター、グラフ化、および記録できます。Fixlet には多くの場合、コンソール・オペレーターが問題を回避できるようにする追加の注意事項が含まれています。Oracle Linux 用パッチ・サイトにサブスクライブしたら、次の操作を実行できます。

- Fixlet を使用したパッチ
- タスクを介して使用可能な YUM パッケージを識別する。
- 「YUM トランザクション履歴」ダッシュボードから、デプロイメントのトランザクションをロールバックしたり、元に戻したり、やり直したりする。
- 「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理」ダッシュボードを使用して、カスタム・リポジトリの登録、追加、登録解除、またはインポートを行う。

 **注:** ローカル・リポジトリは、個別に設定する必要があります。

新機能

Patches for Oracle Linux は、Oracle Linux 6 をサポートするために拡張されています。Oracle Linux 6 のユーザーは、カスタム・リポジトリーや「YUM 履歴」ダッシュボードの機能を利用できるようになりました。

サポートされるアーキテクチャ、エラッタ、リポジトリ

Patches for Oracle Linu のさまざまな機能は、Oracle Linux サイトごとに異なる方法で適用されます。

BigFix Patches for Oracle Linux は、セキュリティー、バグ修正、および Oracle Linux の拡張エラッタをサポートしています。エラッタは、Oracle が Oracle Linux への重要な変更をリリースする個々のパッケージ更新です。エラッタ・パッケージには、セキュリティー、バグ修正、および機能拡張アドバイザリーが含まれています。Oracle Linux エラッタの詳細については、[https://docs.oracle.com/cd/E37670_01/E37355/html/ch03s03.html \(### ## ## \)](https://docs.oracle.com/cd/E37670_01/E37355/html/ch03s03.html (### ## ##)) を参照してください。BigFix Patches for Oracle Linux は、以下の Oracle Linux リポジトリ用にリリースされたエラッタをサポートしています。

表 1. 各 Patches for Oracle Linux サイトに適用可能な機能

Patches for Oracle Linux サイト	サポートされるアーキテクチャ	サポートされるリポジトリ
Patches for Oracle Linux 6	X86-64, i386	<ul style="list-style-type: none"> • 最新 • UEK リリース 4 • UEK リリース 3 • UEK リリース 2 • アドオン • OFED (UEK リリース 4) • OFED 2.0 • OpenStack 1.0 • Ceph 1.0

表 1. 各 Patches for Oracle Linux サイトに適用可能な機能 (続く)

Patches for Oracle Linux サイト	サポートされる アーキテクチャー	サポートされる リポジトリ
Patches for Oracle Linux 7 X86-64		<ul style="list-style-type: none"> • Spacewalk 2.4 サーバー • Spacewalk 2.2 サーバー • Spacewalk 2.0 サーバー • Spacewalk 2.4 クラウドアント • Spacewalk 2.2 クラウドアント • Spacewalk 2.0 クラウドアント • Software Collection 1.2 • MySQL 5.7 • MySQL 5.6 • MySQL 5.5 • GDM Multiseat • 最新 • UEK リリース 4 • UEK リリース 3 • オプションの最新 • OFED (UEK リリース 4) • OFED 2.0 • アドオン • OpenStack 2.0 • Ceph 1.0

表 1. 各 Patches for Oracle Linux サイトに適用可能な機能 (続く)

Patches for Oracle Linux サイト	サポートされる アーキテクチャー	サポートされる リポジトリ
		<ul style="list-style-type: none"> • Spacewalk 2.2 クラ イアント • Software Collection 1.2 • MySQL 5.7 • MySQL 5.6 • MySQL 5.5

使用可能な Oracle Linux パッケージのリストを参照するには、以下の参照情報を参照してください。

- Oracle Linux 6 パッケージ・リポジトリ:<http://yum.oracle.com/oracle-linux-6.html> (####) を参照してください。
- Oracle Linux 7 パッケージ・リポジトリについては、<http://public-yum.oracle.com/oracle-linux-7.html> (####) を参照してください。

 **注:** BigFix Patch for Oracle Linux を使用するには、BigFix バージョン 9.5 以降を使用する必要があります。

BigFix Patch は BigFix RHEL エージェント・バージョン 9.5.2 を使用します。

BigFix は、Oracle Linux が提供している Red Hat Compatible Kernel と、Unbreakable Enterprise Kernel (UEK) の両方をサポートしています。

 **注:** 一部のリポジトリは、Oracle Enterprise Linux の上位互換性を損なう可能性があるため、デフォルトでは有効になっていません。ユーザーが、欠落しているパッケージに関するエラーに遭遇することがあります。詳細については、[よくある質問 \(#### 23\)](#)を参照してください。

サイト適用条件マトリックス

Patches for Oracle Linu のさまざまな機能は、Oracle Linux サイトごとに異なる方法で適用されます。

以下のマトリックスは、各 Oracle Linux サイトに適用される Patches for Oracle Linux の機能を示しています。

表 2. 各 Patches for Oracle Linux サイトに適用可能な機能

BigFix サイト	カスタム・リポジトリー 管理ダッシュボード	「YUM トランザクション履歴」ダッシュボード
Patches for Oracle Linux 6	適用可能	適用可能
Patches for Oracle Linux 7	適用可能	適用可能

Fixlet フィールド

Fixlet には、具体的な詳細を提供するメタデータのフィールドが含まれています。いくつかの Fixlet フィールドは、すべてのドメイン (BigFix サイトのカテゴリー) にわたって共通しています。その他のフィールドは 1 つのドメインや、Patch Management などの 1 つの製品に対してのみ共通しています。

次の表に、Fixlet フィールドとその説明をリストします。

表 3. Fixlet フィールドと説明

Fixlet フィールド	説明\n	BigFix ドメイン
ID	作成者が Fixlet に割り当てた数値 ID。	すべて
名前:	作成者が Fixlet に割り当てた名前。	すべて
適用可能なコンピューターの数	現在 Fixlet の影響を受けている、ネットワーク 内の BigFix クライアントの数。	すべて

表 3. Fixlet フィールドと説明

(続く)

Fixlet	フィールド	説明\n	BigFix ドメイン
カテゴリー	Fixlet のタイプ (セキュリティー・パッチまたは更新など)。	Fixlet のタイプ (セキュリティー・パッチまたは更新など)。	すべて
ダウンロード・サイズ	このアクションでダウンロードされる修正ファイルまたはパッチのサイズ。	このアクションでダウンロードされる修正ファイルまたはパッチのサイズ。	すべて
ソース	Fixlet の情報を提供するソース・ベンダーの名前。	Fixlet の情報を提供するソース・ベンダーの名前。	すべて
ソース ID	Fixlet のソースに関連付けるためにその Fixlet に割り当てられた数値 ID。	Fixlet のソースに関連付けるためにその Fixlet に割り当てられた数値 ID。	すべて
ソース・リリース日	アップストリーム・ベンダーがパッチをリリースする日付。	アップストリーム・ベンダーがパッチをリリースする日付。	すべて
ソースの重大度	Fixlet の作成者が割り当てた、Fixlet の重大度の基準。代表的な値は、「きわめて重要」、「重要」、「中」、「低」です。	Fixlet の作成者が割り当てた、Fixlet の重大度の基準。代表的な値は、「きわめて重要」、「重要」、「中」、「低」です。	すべて
サイト	関連する Fixlet を生成しているサイトの名前。	関連する Fixlet を生成しているサイトの名前。	すべて
ロックを解除されたコンピューターの数	Fixlet の影響を受けるロックを解除されたコンピューターの数。	Fixlet の影響を受けるロックを解除されたコンピューターの数。	すべて
オープンなアクション数	指定された Fixlet に対して開かれている個別アクションの数。	指定された Fixlet に対して開かれている個別アクションの数。	すべて
X-Fixlet-product-family	パッチが所属する製品ファミリー。	パッチが所属する製品ファミリー。	Windows パッチ (BigFix Patch Management に関する)

表 3. Fixlet フィールドと説明

(続く)

Fixlet		
フィールド	説明\n	BigFix ドメイン
X-Fixlet-product	特定の製品ファミリー下の、パッチが所属する製品。	Windows パッチ (BigFix Patch Management に関する)
X-Fixlet-component	特定の製品ファミリー下の、パッチの対象となるコンポーネント。	Windows パッチ (BigFix Patch Management に関する)
変更時刻	指定された Fixlet が最後に変更された時刻。	すべて
X-Fixlet-first-propagation	Fixlet の公開日。	すべて

第2章. セットアップ

パッチ管理のための環境を設定します。

サイトのサブスクリプション

サイトとは、ユーザー、HCL、またはベンダーにより内部的に作成される Fixlet メッセージの集合です。

実装環境内のシステムにパッチを適用するために、サイトにサブスクライブして Fixlet メッセージにアクセスします。

サイトのサブスクリプションを追加するには、ベンダーまたは HCL からマストヘッド・ファイル入手するか、またはライセンス・ダッシュボードを使用します。Fixlet サイトへのサブスクライブ方法について詳しくは、「*BigFix #####*」を参照してください。

サイトについて詳しくは、「*BigFix#####*」を参照してください。

BigFix Patch for Oracle Linux サイトへのサブスクライブ

「ライセンスの概要」ダッシュボードを使用して「Patches for Oracle Linux」サイトにサブスクライブします。

1. 「**BigFix 管理 (BigFix Management)**」ドメインから、「**ライセンスの概要 (License Overview)**」ダッシュボードをクリックします。
2. 「適用可能な Patches for Oracle Linux」サイトまでスクロールダウンし、「**有効化**」をクリックします。
3. 「**サイトを管理**」ノードを開き、適用可能な Patches for Oracle サイトを選択します。たとえば、Patches for Oracle Linux 7 などです。
4. サイト・ダイアログから、「**コンピューターのサブスクリプション**」タブをクリックして、そのサイトを適切なコンピューターに割り当てます。

5. 「オペレーター権限」タブで、サイトに関連付けるオペレーターとオペレーターの権限レベルを選択します。
6. 「変更を保存」をクリックします。

これで「Patches for Oracle Linux」サイトのサブスクライブが完了しました。

ローカル・リポジトリの設定

「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理」ダッシュボードを使用してカスタム・リポジトリを管理します。

BigFix Patch for Oracle Linux は、カスタム・リポジトリの使用をサポートしています。 「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理」ダッシュボードを使用して、カスタム・リポジトリを管理できます。ただし、このダッシュボードはローカル・リポジトリの作成および保守をサポートしません。ローカル・リポジトリを別個に作成する必要があります。

ローカル・リポジトリの作成の詳細については、[http://www.oracle.com/technetwork/articles/servers-storage-admin/yum-repo-setup-1659167.html \(#####\)](http://www.oracle.com/technetwork/articles/servers-storage-admin/yum-repo-setup-1659167.html) を参照してください。

第 3 章. Patch for Oracle Linux の使用

Fixlet を使用したパッチ

BigFix コンソールからパッチを適用できます。コンソール・ナビゲーション・ツリーの「パッチ管理」ドメインで、「OS ベンダー」をクリックして、「Oracle Linux」をクリックします。適用する Fixlet をダブルクリックします。Fixlet ウィンドウの上部にあるタブをクリックして、追加の詳細情報を確認し、「アクション」ボックス内の該当するリンクをクリックして、適用を開始します。「OK」をクリックします。

YUM ユーティリティーを使用したパッチ適用

Yellow dog Updater Modified (YUM) は、Red Hat Package Manager (RPM) パッケージを更新、インストール、および削除するパッケージ管理ツールです。YUM ではコマンド・ライン・インターフェースを使用して、パッケージのインストール、アンインストール、および更新の処理を単純化します。これらの処理では YUM リポジトリへのアクセス権限が必要です。

YUM ユーティリティーの設定

「Oracle Linux 用パッチ」サイトは、Fixlet 設定 `in /etc/yum.conf.` で YUM ユーティリティー設定を使用します。以下の YUM 構成設定は Fixlet 設定では使用されません。

- `cachedir`
- `keepcache`
- `plugins`
- `reposdir`
- `pluginpath`
- `pluginconfpath`
- `metadata_expire`
- `installonlypkgs`

置き換え

置き換えについて詳しくは、「Windows 以外での置き換え (#####)」を参照してください。

第 4 章. YUM トランザクションの管理

「YUM トランザクション履歴」ダッシュボードを使用して、YUM トランザクション履歴を表示しトランザクションを管理します。

このダッシュボードには YUM トランザクション履歴が表示され、適用環境内でトランザクションをロールバックしたり、元に戻したり、やり直したりするのに使用できます。

ロールバック

ロールバック機能は、指定したトランザクションの時点までのトランザクションをすべて取り消します。

元に戻す

元に戻す機能は、選択したトランザクションのみを元に戻します。

繰り返し

やり直し機能は最近のトランザクション・アクションを繰り返します。

■ 注: アクティブ・カーネルをカーネル更新に対してロールバックすることはできません。

要件

「YUM トランザクション履歴」ダッシュボードを使用するには、以下の要件が満たされていることを確認してください。

- BigFix バージョン 9.5 以降を使用してください。
- Oracle Linux 6 以降を使用してください。
- YUM バージョン 3.2.28 以降を使用している。

■ 注: ロールバック機能は YUM バージョン 3.2.29 以降でサポートされています。

■ 注: 選択したエンドポイントの YUM バージョンが 3.2.29.22 より前の場合、ダッシュボードでその YUM バージョンの隣に警告サインが表示され、ロールバック・アクションがサポートされないバージョンであることを示します。サポートされない

バージョンの場合、すべてのトランザクションに対して「ロールバック」ボタンが無効になります。

- ・「パッチ・サポート」サイトをサブスクライブする。
- ・YUM トランザクション履歴分析をアクティブ化する。

YUM トランザクション・アクション

「アクション」列は、ダッシュボードでの YUM トランザクション・アクションを示します。以下の表に、トランザクションごとのアクションの詳細を示します。

表 4. トランザクション・アクションの説明

アクション	省略形	説明\n
ダウングレード	D	少なくとも 1 つのパッケージが以前のバージョンにダウングレードされました。
消去	E	少なくとも 1 つのパッケージが削除されました。
以下をインストール	I	少なくとも 1 つの新しいパッケージがインストールされました。
廃止	O	少なくとも 1 つのパッケージが廃止としてマーク付けられました。
再インストール	R	少なくとも 1 つのパッケージが再インストールされました。
更新	U	少なくとも 1 つのパッケージが新しいバージョンに更新されました。

YUM 履歴について詳しくは、[Red Hat Product Documentation \(#####\)](#) サイトを参照してください。

YUM トランザクション分析

ダッシュボードでは、以下の分析が使用されます。

YUM トランザクション履歴分析

BigFix Patches for Oracle Linux は、「YUM トランザクション履歴」ダッシュボードで実行されるアクションの結果を記録するログを生成します。YUM 履歴トランザクション分析は、アクション・ログ `yum_history.log` の内容を取得します。ログは、`/var/opt/BESClient/EDRDeployData/yum_history.log` にあります。

YUM ログ分析

YUM ログは、YUM がデフォルトで `/var/log/yum.log` に生成する正式なログです。デフォルトの場所を変更するには、`/etc/yum.conf` のログ・ファイルの設定を変更します。YUM ログ分析は、トラブルシューティングの目的に非常に有効です。

分析には 2 つのプロパティーがあります。

YUM ログ・プロパティー

実行された操作をすべてログに記録し、変更されたトランザクションを識別します。このログは、YUM ログ・ファイルの最後の 40 行を取得します。

YUM 履歴ダッシュボードのアクション・ログ

このログは、アクションからのやり直しの操作、元に戻す操作、およびロールバックの操作のアクション・ログをリストします。アクションは、`/var/opt/BESClient/EDRDeployData/yum_history.log` にログを書き込みます。YUM 履歴ダッシュボードのアクションは、5 件の最新アクションを記録します。

トラブルシューティング

「YUM トランザクション履歴」ダッシュボードのトラブルシューティングを実行するには、`var/opt/BESClient/EDRDeployData` 内の `yum_history.log` ファイルを確認します。

YUM トランザクションのロールバック

YUM トランザクションをロールバックする方法について説明します。

以下の要件を満たしていることを確認してください。

- BigFix バージョン 9.5 以降を使用してください。
- Oracle Linux 6 以降を使用してください。
- YUM バージョン 3.2.28 以降を使用している。ロールバック機能は YUM バージョン 3.2.39 以降でサポートされています。

■ 注: 選択したエンドポイントの YUM バージョンが 3.2.29.22 より前の場合、ダッシュボードでその YUM バージョンの隣に警告サインが表示され、ロールバック・アクションがサポートされないバージョンであることを示します。サポートされないバージョンの場合、すべてのトランザクションに対して「ロールバック」ボタンが無効になります。

- 「パッチ・サポート」サイトをサブスクライブする。
- YUM トランザクション履歴分析をアクティビ化する。

1. BigFix コンソールを使用して、「外部サイト」>「パッチ・サポート」>「ダッシュボード」>「YUM トランザクション履歴」に移動します。
2. YUM 履歴を表示するエンドポイントを選択します。

- 注:** 選択したエンドポイントの YUM バージョンが 3.2.29.22 より前の場合、そのバージョンはサポートされていないことがツールチップで示されます。
3. ロールバックするトランザクションを選択します。
 4. 「ロールバック」をクリックします。

5. 「トランザクションまでロールバック」 ウィンドウが開きます。オプション: フィールドにフラグを追加することができます。 「適用」 をクリックします。
6. 「アクションの実行」 ウィンドウで、コンピューターを選択し、「OK」 をクリックしてアクションを実行します。

YUM トランザクションの取り消し

この機能を使用して、単一の特定のトランザクションを元に戻します。

以下の要件を満たしていることを確認してください。

- BigFix バージョン 9.5 以降を使用してください。
- Oracle Linux 6 以降を使用してください。
- YUM バージョン 3.2.28 以降を使用している。

 **注:** ロールバック機能は YUM バージョン 3.2.39 以降でサポートされています。

 **注:** 選択したエンドポイントの YUM バージョンが 3.2.29.22 より前の場合、ダッシュボードでその YUM バージョンの隣に警告サインが表示され、ロールバック・アクションがサポートされないバージョンであることを示します。サポートされていないバージョンの場合、すべてのトランザクションに対して「元に戻す」ボタンが無効になります。

- 「パッチ・サポート」 サイトをサブスクライブする。
- YUM トランザクション履歴分析をアクティビ化する。

1. BigFix コンソールを使用して、「外部サイト」 > 「パッチ・サポート」 > 「ダッシュボード」 > 「YUM トランザクション履歴」 に移動します。
2. YUM 履歴を表示するエンドポイントを選択します。
3. 元に戻すロールバックがあるトランザクションを選択します。
4. 「元に戻す」 をクリックします。
5. 「トランザクションの取り消し」 ウィンドウで「適用」 をクリックします。
6. 「アクションの実行」 ウィンドウで、コンピューターを選択し、「OK」 をクリックしてアクションを実行します。

YUM トランザクションのやり直し

この機能を使用しては最近のトランザクション・アクションを繰り返します。

以下の要件を満たしていることを確認してください。

- BigFix バージョン 9.5 以降を使用してください。
- Oracle Linux 6 以降を使用してください。
- YUM バージョン 3.2.28 以降を使用している。

■ 注: 選択したエンドポイントの YUM バージョンが 3.2.29.22 より前の場合、ダッシュボードでその YUM バージョンの隣に警告サインが表示され、ロールバック・アクションがサポートされないバージョンであることを示します。サポートされていないバージョンの場合、すべてのトランザクションに対して「やり直し」ボタンが無効になります。

- 「パッチ・サポート」サイトをサブスクライブする。
- YUM トランザクション履歴分析をアクティブ化する。

■ 注: アクティブ・カーネルをカーネル更新に対してロールバックすることはできません。

1. BigFix コンソールを使用して、「外部サイト」>「パッチ・サポート」>「ダッシュボード」>「YUM トランザクション履歴」に移動します。
2. YUM 履歴を表示するエンドポイントを選択します。
3. やり直すトランザクションを選択します。
4. 「やり直し」をクリックします。
5. 「トランザクションのやり直し (Redo Transaction)」ウィンドウで「適用」をクリックします。
6. 「アクションの実行」ウィンドウで、コンピューターを選択し、「OK」をクリックしてアクションを実行します。

YUM のパッケージ更新の確認

タスクを使用して、適用環境にインストールする必要がある YUM のパッケージ更新を確認できます。

Oracle Linux エンドポイントに適用可能な YUM のパッケージ更新の詳細を示すリストを参照できます。

「ID 39: YUM: 使用可能なパッケージ更新の確認」タスクを実行すると、YUM ログ分析の新規列に結果が表示されます。このタスクでは、インストールされているパッケージに対してどの更新が使用可能であるかを、`yum check-update` を使用して判別します。このタスクは、適用環境内のリポジトリを使用します。このタスクを実行する際は、リポジトリ内で YUM パッケージが使用可能であることを確認してください。

「YUM: 使用可能なパッケージ更新の確認」タスクの使用

- ・「パッチ・サポート」サイトをサブスクライブする。
- ・YUM ログ分析が有効になったいることを確認します。
- ・エンドポイントがリポジトリを使用していること、および YUM パッケージがこのリポジトリ内で使用可能であることを確認します。

1. コンソールから、「パッチ・サポート (Patching Support)」サイトに移動し、次のタスクを選択します。ID 39: YUM: 使用可能なパッケージ更新の確認。
2. 「アクションの実行」をクリックして、タスクを実行します。
3. 「OK」をクリックします。
4. アクションが完了したら、「パッチ・サポート (Patching Support)」>「分析」>「分析: YUM ログ」に移動し、「結果」タブを選択します。

「YUM 更新チェック出力」列が追加され、インストールが必要な更新がエンドポイントに存在するかどうかを確認できます。

第 5 章. カスタム・リポジトリの管理

「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理」ダッシュボードを使用して、リポジトリを登録および管理します。

カスタム・リポジトリを使用すると、ご使用の適用環境のエンドポイントに適用できる内容を柔軟に制御できます。たとえば、カスタム・リポジトリに自分がホストするカスタム・ソフトウェアを適用できます。「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理」ダッシュボードを使用して、標準リポジトリとサテライト・リポジトリを登録および管理します。BigFix Patch for Oracle Linux のユーザーは、ダッシュボードを使用して以下のアクションを実行できます。

- カスタム・リポジトリの登録、登録解除、追加、削除、インポート。
- BigFix を使用してカスタム・ソフトウェアを配信します。カスタム・リポジトリのサポートでは、既存のローカル・リポジトリを使用して帯域幅を節約し、パフォーマンスを改善します。

現在の BigFix インフラストラクチャー (Patch for Oracle Linux サイトの Fixlet が Oracle Linux サーバーからパッチを直接ダウンロードすることができる) に従う代わりに、Fixlet では、YUM によるローカル・リポジトリからのダウンロードが可能になっています。

以下の要件を満たしていることを確認してください。

- BigFix バージョン 9.5 以降。
- 最小 YUM バージョン: YUM 3.2.19-18
- 「パッチ・サポート」サイトをサブスクライブする。
- 「パッチ・サポート」サイトから「リポジトリ構成 - Oracle Linux 分析」をアクティビ化して、ダッシュボードにアクセスする。

注: このダッシュボードは、ローカル・リポジトリの作成および保守をサポートしません。ローカル・リポジトリを別個に作成する必要があります。

「パッチ・サポート」サイトから YUM タスクを使用することにより、インストール・パッケージを使用して、カスタム・リポジトリ内にあるカスタム・ソフトウェアをインストールします。

リポジトリの登録

ダッシュボードを使用して、既存のリポジトリを登録してエンドポイントに接続することができます。

「リポジトリ構成 - Oracle Linux」分析をアクティブ化します。

1. 「すべてのコンテンツ」ドメインから、「サイト」>「外部サイト」>「パッチ・サポート」>「ダッシュボード」>「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理 (Oracle Linux Custom Repository Management)」に移動します。
2. 「エンドポイント」タブをクリックして、エンドポイントを選択します。選択したエンドポイントのリポジトリが、ウィンドウの下部にリストされます。リポジトリに未指定として名前が付けられる場合は、「リポジトリ」リストにリストされないことを意味します。
3. 「新規リポジトリの登録 (Register a new repository)」をクリックします。
4. 「新規リポジトリの登録 (Register a New Repository)」ウィンドウで、リポジトリを選択して「次へ」をクリックします。後続のウィンドウに、登録するリポジトリの名前と URL が表示されます。
5. このステップはオプションです。「追加フィールド (Additional Fields)」に詳細な構成情報を追加することもできます。この情報は、YUM 構成ファイルに保存されます。

注: ベンダー・サイトの単なるミラーではないカスタム・リポジトリを持つユーザーは、「追加フィールド (Additional Fields)」に `gpgcheck=0` を追加する必要があります。gpg シグニチャー・ファイルが除外されると、rpm ファイルに対して認証チェックが行われず、インストールが失敗する可能性があります。

6. 「保存」をクリックします。
7. 「アクションの実行」ウィンドウで、コンピューターを選択し、「OK」をクリックしてアクションを実行します。

エンドポイントからのリポジトリの登録解除

ダッシュボードを使用して、エンドポイントからリポジトリを登録解除できます。

リポジトリを登録解除すると、ダッシュボードは、選択されたコンピューターからシステム ID ファイルを削除します。サテライト・サーバーにログインし、そのコンピューターを手動で削除する必要があります。

1. 「すべてのコンテンツ」ドメインから、「サイト」>「外部サイト」>「パッチ・サポート」>「ダッシュボード」>「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理 (Oracle Linux Custom Repository Management)」に移動します。
2. 「エンドポイント」タブをクリックして、「新規レジストリーの登録解除 (Unregister a new repository)」をクリックします。
3. 「新規リポジトリの登録解除 (Unregister a New Repository)」ウィンドウで、リポジトリを選択して「保存」をクリックします。
4. 「アクションの実行」ウィンドウで、コンピューターを選択して「OK」をクリックします。

 **注:** リポジトリを登録解除すると、YUM 構成ファイルは削除されず、無効化のみが行われます。

リポジトリの追加

「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理」ダッシュボードを使用して、リポジトリを追加することができます。

1. 「すべてのコンテンツ」ドメインから、「サイト」>「外部サイト」>「パッチ・サポート」>「ダッシュボード」>「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理 (Oracle Linux Custom Repository Management)」に移動します。
2. 「リポジトリ」タブで、追加するリポジトリを選択して「追加」をクリックします。
3. 「新規リポジトリの追加」ウィンドウで、「名前」フィールドと「リポジトリ URL」フィールドに値を入力します。**注意:** サテライト URL を入力すると、ブートストラップ URL が自動的に入力されます。ブートストラップは、サテライト・サーバーで作成されます。
4. 「保存」をクリックします。

リポジトリがダッシュボードに追加されました。追加したリポジトリがエンドポイントで使用されるようにするには、「エンドポイント」タブに移動してそのリポジトリを登録します。

リポジトリのインポート

ユーザーは、この機能を使用して既存のリポジトリをインポートすることができます。

「リポジトリ構成 - Oracle Linux」分析をアクティブ化して、ダッシュボードにエンドポイントおよびリポジトリの情報を取り込みます。

既存のリポジトリをインポートする場合、以下の項目が以下の順序で .repo ファイルに入力されていることを確認してください。

```
name=
baseurl=
enabled=
gpgcheck=
```

1. 「すべてのコンテンツ」ドメインから、「サイト」>「外部サイト」>「パッチ・サポート」>「ダッシュボード」>「Oracle Linux カスタム・リポジトリ管理 (Oracle Linux Custom Repository Management)」に移動します。
2. 「リポジトリ」タブをクリックし、「インポート」をクリックします。
3. 「既存のリポジトリのインポート (Import Existing Repositories)」ウィンドウで、リポジトリを選択して名前を指定します。
4. 「保存」をクリックします。

リポジトリは、ダッシュボードにインポートされ、リポジトリのリストに追加されるようになります。

第6章. よくある質問

このセクションの質問と回答は、Patch for Oracle Enterprise Linux をよりよく理解するために役立ちます。

Oracle Linux パッチ更新のデプロイメントに失敗した原因は何ですか？

一部のリポジトリは、Oracle Enterprise Linux の上位互換性を損なう可能性があるため、デフォルトでは有効になっていません。これにより、パッチのデプロイメントに失敗する場合があり、ユーザーは EDRDeployData.log ファイルに示されている以下のようなエラーを受け取る可能性があります。

```
No package kernel-devel-3.10.0-514.26.1.0.1.el7.x86_64 available
.

No package kernel-headers-3.10.0-514.26.1.0.1.el7.x86_64 available.

No package kernel-tools-3.10.0-514.26.1.0.1.el7.x86_64 available.

No package kernel-tools-libs-3.10.0-514.26.1.0.1.el7.x86_64 available.

No package perf-3.10.0-514.26.1.0.1.el7.x86_64 available.

No package python-perf-3.10.0-514.26.1.0.1.el7.x86_64 available

.

Error: Nothing to do
```

ユーザーは、上位互換が必要かどうかを決定する必要があります。

以下のステップに従って、欠落しているリポジトリを有効にします。

1. /etc/yum.repos.d/public-yum-ol7.repo に移動し、OL7 リポジトリ・ファイルを探します。
2. リポジトリのエントリー (この場合は [ol7_MODRHCK]) が存在する場合は、そのエントリーが有効になっていることを確認します。
3. リポジトリ・エントリーが存在しない場合は、以下のエントリーを追加します。

```
[ol7_MODRHCK]
name=Latest RHCK with fixes from Oracle for Oracle Linux $r
eleasever ($basearch)
baseurl=http://yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL7/MODRHCK\_
          /$basearch/ (####)
gpgkey=file:///etc/pki/rpm-gpg/RPM-GPG-KEY-oracle
gpgcheck=1
priority=20
enabled=1
```

4. 変更を保存します。

付録 A. サポート

この製品について詳しくは、以下のリソースを参照してください。

- [Knowledge Center \(####\)](#)
- [BigFix サポート・センター \(####\)](#)
- [BigFix サポート・ポータル \(####\)](#)
- [BigFix Developer \(####\)](#)
- [BigFix Wiki \(####\)](#)
- [HCL BigFix フォーラム \(####\)](#)

特記事項

本書は米国で提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 HCL の営業担当員にお尋ねください。本書で HCL 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その HCL 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、HCL の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用できます。ただし、HCL 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

HCL は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

HCL 330 Potrero Ave. Sunnyvale, CA 94085 USA Attention: Office of the General Counsel

2 バイト文字セット (DBCS) 情報についてのライセンスに関するお問い合わせは、お住まいの国の HCL Intellectual Property Department に連絡するか、書面にて下記宛先にお送りください。

HCL 330 Potrero Ave. Sunnyvale, CA 94085 USA Attention: Office of the General Counsel

HCL TECHNOLOGIES LTD. 本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは默示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。HCL は予告なしに、隨時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において HCL 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この HCL 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

HCL は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対して何ら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および(ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

HCL 330 Potrero Ave. Sunnyvale, CA 94085 USA Attention: Office of the General Counsel

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用できますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンスプログラムまたはその他のライセンス資料は、HCL 所定のプログラム契約の契約条項、HCL プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、HCL より提供されます。

本書に含まれるパフォーマンスデータは、特定の動作および環境条件下で得られたものです。実際の結果は、異なる可能性があります。

HCL 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。HCL は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。HCL 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

HCL の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があり、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、類似する個人や企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプルプログラムが書かれているオペレーティングプラットフォームのアプリケ

ションプログラミングインターフェースに準拠したアプリケーションプログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、HCL に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布できます。このサンプルプログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。したがって HCL は、これらのサンプルプログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証したりすることはできません。これらのサンプルプログラムは特定物として現存するままの状態で提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。HCL は、お客様の当該サンプルプログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプルプログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。© (お客様の会社名) (西暦年)。このコードの一部は、HCL Ltd. のサンプルプログラムから取られています。

商標

HCL Technologies Ltd.、HCL Technologies Ltd. ロゴ、および hcl.com は、世界の多くの国で登録された HCL Technologies Ltd. の商標または登録商標です。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Oracle やその関連会社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の製品名およびサービス名等は、それぞれ HCL または各社の商標である場合があります。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下のご使用条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用度

HCL Web サイトの「ご利用条件」に加えて、以下のご使用条件が適用されます。

個人使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製できます。ただし、HCL の明示的な承諾を得ずには、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布(頒布、送信を含む)または表示(上映を含む)したりすることはできません。

商用使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示できます。ただし、HCL の明示的な承諾を得ずには、これらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示したりすることはできません。

権限

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が HCL の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、HCL はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

HCL は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態で提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは默示の保証責任なしで提供されます。